

# 甲元眞之教授を送る

歴史学科長 木下尚子

本学部歴史学科歴史資料学コースの甲元眞之教授が、2010（平成22）年3月をもって定年退職される。甲元教授は東アジアの先史時代を研究される考古学者である。

教授は、1944（昭和19）年、広島県三次市吉舎町（旧双三郡）に出生された。三次盆地から少し山あいにはいったこの地で少年期を過ごされた教授は、「山紫水明な地」で育ったことを誇らしげに口にされる。教授はその後東京教育大学歴史学科で考古学と民俗学を学ばれ、さらに東京大学に進んで修士課程・博士課程を修められた。教授は青年期において、東京教育大学で考古学者の八幡一郎教授に教えを受け、東京大学で民族学者の大林太良教授、考古学者藤本強教授の薫陶を受けられ、民族学・日本考古学・外国の考古学・考古学の方法論について広くトレーニングを受けられた。教授の民族学への深い造詣と東西の文献を自由に読みこなす語学力は、このときの鍛錬の賜物と推察する。

その後京都市にある財団法人古代学協会・同付設平安博物館を経て、1977（昭和52）年熊本大学法文学部（当時）の助教授として赴任された。当時の考古学研究室は国史Bとして日本史学から分離し、1975年にようやく考古学の旗をあげた若い小さな研究室であった。書架に書物もまばらな研究室を基地に、白木原教授とともに毎年の発掘調査を通した地道な調査研究と教育が始まったのである。歴史学科で最大の蔵書数をもつ今日の考古学研究室からは想像しにくい姿である。1994（平成6年）に白木原教授が退任されてからは主任教授として都合33年にわたって教鞭をとられ、この間韓国・中国からの留学生を含む254人の卒業生を世に送られた。

文学部では歴史学科長を3期勤められ、学科の運営に尽力された。また2002年には博士課程を創設するためにその中心的役割を果たされた。この頃の教授は連日会議や打ち合わせに忙殺され、苛酷な業務をこなされておられる様子が、隣室のわたしにも伝わってきた。その甲斐あって文学部に博士課程が設立され、今日に続く社会文化科学研究科の基礎が築かれたのである。教授はその運営にも力を注がれ、7名の課程博士を指導された。また在野の研究者への配慮を欠かさず、すでに5名が教授のもとで博士号を取得した。全学的なご功績として、埋蔵文化財調査室を創設をあげねばならない。学内の再開発に際して、大学が遺跡に立地していることを重視する立場から調査室設置の必要性を説か

れ、1994年に全学施設として独自の調査室が開設されたのである。教授はその開室後11年にわたり室長を勤め、学内遺跡の調査と文化財保護の精神の普及に力を注がれた。

甲元教授の研究は日本列島全域、朝鮮半島、中国、沿海州に及び、その主要なテーマは生業である。ご研究の成果はこれまでに大部な5冊の書物として上梓され、1998（平成10）年にはすぐれた考古学研究に贈られる濱田青陵賞（第11回）が授与された。また地元熊本県の歴史研究への貢献も多く、2008（平成20）年には杉井健准教授とともに著した上天草市史に対して天草出版文化賞が贈られた。

現在甲元教授は、永青文庫研究センター長として多忙な毎日を送っておられるが、一方で九州古代種子研究会会長として最先端の研究をリードされ、また気候変化と考古学の関係を追究すべく全国の砂丘踏査を継続しておられる。教授の止むところない探求心はこれからも変わらないであろう。

文学部に大きな足跡をのこされた甲元教授をお送りするに当たり、浅からぬ感慨がある。教授の長年にわたる本学へのご功績に感謝と敬意を表し、ますますのご健勝をお祈り申し上げる。

2010年2月